史料紹介　森本州平日記（一）

東京大学文学部
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、神戸大学教授須崎慎一氏が、『論集』（神戸大学教養部紀要）三五号（一九八五年三月）から五〇号にわたって筆耕・連載された日記の続きにあたる。須崎氏は、一九二四（大正一三）年一月から二九（昭和四）年八月までの日記を精緻に起こす作業を長く続けてこられた。

その作業を、なぜ東大文学部の日本近代政治史ゼミが引き継ぐかたちとなったのかを述べる前に、まずは森本州平とはいかなる人物なのかを明らかにしておきたい。須崎氏の解題が余すところなくその輪郭を描いているので、少し長くなるが、『論集』三五号の冒頭部分から紹介する。

森本州平は、一八八五（明治一八）年六月、長野県下伊那郡山本村（現在飯田市）竹村大助の二男として生れた。満十歳の時、同郡松尾村（現在飯田市）の森本勝太郎（当時県会・郡会議員、翌一八九五年より村長）の長女増恵との養子縁組がととのい、下伊那郡有数の地域名望家であった森本家の嗣子となっていく。以後、一九〇四年、飯田中学校（現飯田高校）卒業、〇五年、東京高等商業学校（現一橋大学）に入学、卒業後、一年志願兵として豊橋第一五師団に入営、一九一三年、陸軍三等主計に任ぜられた。

退営後、病気療養の期間を経て、森本州平は、村長である父を助け、二〇町歩余の地主経営を行なうとともに、松尾村青年会長を皮切に、村軍人分会長、村産業組合役員（一九二九―三三年の間は産業組合長）、村議など村の役職をつとめていく。そのかたわら彼は、帝国在郷軍人会郡聯合分会の幹部、郡下組合製糸の共同出荷にあたる伊那社の役員、百十七銀行（後、八十二銀行に合併）・南信新聞などの重役を歴任する。同時に彼が注目されねばならないのは、こうした地域名望家としての行動パターンの他に、

下伊那郡国民精神作興会をつくり、その専任幹事をつとめたことである。そして彼は、次第に政友会から離れ、それに比例するかのように、地域の右翼・ファッショ団体＝猶興社・愛国勤労党南信支部結成の中心人物となっていく。ちなみにその後、満州事変以降、森本州平は、こうした運動と一定の距離をおくようになり、一九三三年、父勝太郎逝去後、農業経営に専念することになる。ために役職的には、下伊那の大政翼賛会委員や、敗戦直前、松尾村新井の区長（それ以前の耕地委員〔惣代〕）などをつとめるにとどまる。なお戦後は、農地被買収者同盟下伊那地方支部長（一九五三―六一年）として活動し、一九七一（昭和四六）年、八七歳で没した。

森本州平は、一九〇五年から六七年まで、入院加療中の一時期を除き、基本的には毎日、丹念に日記を書いていた。外交官志望だったという州平だけに、〇五年から〇八年にかけての四冊の日記は英文で書かれている。その他、二四年、下伊那地方に起こった社会主義運動家の検挙事件であるＬＹＬ事件後、同地方の社会主義運動に対抗するため、州平によって組織された下伊那国民精神作興会（同年一〇月設立）関係の史料をはじめとして、四百点余の貴重な史料をのこした。

これらの日記や史料は、州平没後、飯田市教育長などを務めた森本家当主・森本信也氏によって保管されていたが、「現代史の貴重な資料ということで、図書館で保存、役立ててもらえれば」（『信濃毎日新聞』八一年八月一三日付）との信也氏の考えによって、七六年三月二九日、飯田図書館（現、飯田中央図書館）に寄贈された。その内訳は、①「信濃大衆新聞」などの新聞、②長野県特別高等警察課資料をはじめとする社会・思想運動関係資料、③下伊那国民精神作興会関係諸資料、④在郷軍人会関係資料、⑤愛国勤労党・愛国大衆党関係資料、⑥猶興社関係資料、などである。その後、八一年には、「産業組合・農会関係資料」が追加寄贈され、全体で五百点に迫る点数となった。飯田中央図書館には、森本文書目録、「飯田市松尾新井　森本信正氏所蔵文書　細胞目録」が整備されている。

日記は、現在の当主である森本信正氏によって引き続き保管されている。すでに述べたように、須崎氏の手によって、二九年八月まで翻刻された州平日記の続きの部分に関して、少なくとも三五年くらいまでの部分を活字にしたいと考えられた信正氏は、飯田市歴史研究所（二〇〇三年設立）の齊藤俊江氏に相談された。森本・齊藤両氏からの相談を、飯田市誌編纂事業有識者会議の座長を務めるなど、同研究所の設立以前から飯田市の歴史研究に深くかかわってきた、近世史を専門とする東京大学教授吉田伸之氏が、当ゼミ担当教員である加藤陽子に伝えたことで、当ゼミによる森本州平日記研究と翻刻はスタートした。

ゼミで日記を読み、翻刻していくにあたり、何の制約も課されず自由に使用する許可を与えてくださった森本信正氏に、まずはお礼申し上げる。森本氏は、原本と日記の翻刻を照合された上で、種々のアドバイスをくださった。蚕の病気名など、ゼミ生ではなかなか知り得ない知識もご教示くださった。

ついで、飯田市歴史研究所の齊藤俊江氏に感謝したい。齊藤氏は飯田図書館司書として勤務されていた時には、森本州平関係資料などの受入れ・整理に奔走され、その後、飯田市誌編纂室に移られてからは、満洲移民の原史料を含む役場文書など、重要な近代史資料の収集、適

正な保管・整理に当たられた。飯田における近現代史料の収集・整理・保存は、齊藤氏の存在なしには語れないのではないかと思われる。氏は、二〇〇二年から、京都大学の蘭信三教授、日中友好協会飯田支部理事長の長沼計司氏とともに、「満蒙開拓を語りつぐ会」を発足させ、満洲からの帰国者の聞き取りを始められた。その成果は満蒙開拓を語り継ぐ会編『下伊那のなかの満洲　聞き書き報告集』（一～四）として刊行されている。本報告集の特徴は、「この地方の人が、この地方の言葉で、帰国者から聞き取り」をしたことで、専門の研究者ではない市民が呼びかけに応じて参加し、テープ起こしまで行ったことにある。

森本氏と齊藤氏は、伊那近代思想研究会（森本州平日記を読む会）の会員でもある。同研究会は、一九九四年五月、結成された。代表の松上清志氏は、研究会発足の動機と背景を「伊那谷の近代の思想を探り、自分たちの生き方や伊那谷の将来を考えたいということで、当初は三十人ほどが集まって始まった会である。今は亡き後藤総一郎明治大学教授の熱い思いとご指導のもとに発足した会でもあった」と、『伊那思想史（稿）』（塩澤栄三著、伊那思想史研究会発行）の「はしがき」にまとめている。

伊那近代思想研究会は、結成後の十年間は、森本州平日記を読むこととし、須崎氏によって活字化された州平日記を用いて、毎月の例会で読み続けてこられたという。研究会参加者によって執筆された森本日記についての研究成果は、九七年から現在にいたるまで『伊那民俗学研究所報』に連載されている。以下、会員の名前とレポートのテーマを紹介しておきたい。

清水三郎「青年運動と作興運動の対立」『伊那民俗学研究所報』二九号、九七年六月
松上清志「二つの思想が交差した軍教問題対談会」『同』三一号、九七年一二月
片桐みどり「下伊那青年会は南北朝対立の如し」『同』三三号、九八年六月
清水三郎「青年訓練所と郡青・政研の対応」『同』三七号、九九年六月
松上清志「森本州平　その生涯と思想　その一」『同』三八号、九九年九月
齊藤俊江「下伊那郡国民精神作興会会報『作興』　森本資料紹介一」『同』三九号、九九年一二月
松上清志「森本州平　その生涯と思想　森本資料紹介二」『同』四〇号、二〇〇〇年三月
森本信正「祖父　州平の思い出」『同』四一号、二〇〇〇年六月
齊藤俊江「『伊那思想史稿』と『第一線』　森本資料紹介三」『同』四二号、二〇〇〇年九月
長沼計司「中原謹司のこと」『同』四四号、〇一年三月
依田時子「州平伯父を偲ぶ」『同』五〇号、〇二年九月
竹下のぶ子「森本家との関わり」『同』五一号、〇二年一二月
中島邦芳「新井労働団の結成」『同』五三号、〇三年六月
松上清志「森本州平日記にみる天竜川水力発電問題」『同』五五号、〇三年一二月
和田憲「新渡戸稲造　来飯す」『同』五七号、〇四年六月
河合政勝「私史60年の追想」『同』五九号、〇四年一二月

粟谷真寿美「下伊那地方における実行会の系譜」『同』六一号、〇五年六月
齊藤俊江「森本資料紹介四　国民精神作興会関係資料」『同』六三号、〇五年一二月

最後に、須崎慎一氏の一連の研究なしに、森本日記は語れないことを改めて記しておきたい。須崎氏と森本日記との出会いは、氏の著作『日本ファシズムとその時代』（大月書店、一九九八年）の「あとがき」に詳しい。氏は森本州平日記の他、中原謹司文書の発掘にも関わられた。ゼミにおける日記の解読にあたっては、須崎氏が日記の筆耕を連載された『論集』（神戸大学教養部紀要）がどれだけ役だったか知れない。心からお礼申し上げる。

二〇〇六年度の日本近代政治史ゼミ参加者は原則としてすべて筆耕にかかわった。メンバーは以下のとおりである。有住昌恭、世良田英晴、立本紘之、高橋哲（以上、大学院修士課程）、青木陽平、鈴木健太郎、青木崇、今井東行、岩武康平、近藤龍太、志賀桜子、中村惇二、原田瑞恵、松本亜紗美、水谷悠、山田良太、湯川文彦（以上、学部四年）、有吉拓朗、井上陽介、梅田真治、大口智秀、太田仙一、国分航士、佐藤愛果、高橋知之、田所伸悟、中村友信、前田亮介、村井隆太、山本大樹、吉井文美、渡邊陽一郎（以上、学部三年）、植田泰史（研究生）。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、句読点濁点を付し、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家の家族関係の記事などにつき、〔省略〕あるいは、＊＊などを用いた。

今回紹介するのは、二九年九月、一〇月、一一月の三か月分の森本州平日記である。本来は日記から読み取れる内容について解題を付すべきであるが、一二月分について採録する時間的余裕がなかった。二九年分の解題は、二九年一二月から翌年六月分までの紹介を予定している次回、掲載するつもりであることを予めお断りしておく。

（加藤陽子）

森本州平日記　一九二九（昭和四）年

九月一日　日曜

晴少雨。朝少雨あり。二百十日なれは今日は雨天かと思ひしに、一時間計りの後晴れたり。上松春樹新盆にて見舞さりし故墓参の為出頭し、旁々阿智川にて釣鮎を試みんと出ず。午前十時着、墓参の後直に釣に出かけ弁当を持参せり。僅ニ午後より二尾を獲たるのみ。砂流れて釣れず。午後四時終り帰りて夕食の饗をうけ午後七時発八時半頃帰宅す。

九月二日　月曜

晴。組合支所より銀行へ行く。糸量課帳簿訂正事件より工女の不安と一般の動揺ありしが、予は直接女工に面会して其の状況を察知するの要ありと認め、各工場より三人の代表者を選出せしめ組合長と面談する事としたり。青山出勤前なれば手紙にて其趣申送る。銀行放課後直に組合に来り、午後七時より支所階上にて女工代表と会見し、種々操糸上の問題より試験の問題に移りしが、追々話の進むに従ひ工女側より種々の意見出て、＊沢が元凶なれば彼を処分せよと云ふ声多く、其の情勢容易ならずと察知せり。よつて此形勢にては断然たる処置に

出てされは到底事穏にすまさる事を決心せり。＊島＊サ＊等、雄弁にとき立てたり。

九月三日　火曜

晴。組合支所行。江塚田中青山と会合して、試験課帳簿訂正問題より、引いて一般工女の不安併に＊沢に衆目の一致したる点より、彼の排斥運動となり遂に一般工女の動揺となり、他へも話漏れたれば何とか処置されば叶はすと思ひ研究せり。予は＊沢を罪に落さずして監督者として衆人の信頼去りたりと云ふ事を理事として引責せしむる事とせんと主張し、青山は之は調査をして不公正のものを除くより外なし、其の元凶は試験課糸量課にありと主張し、田中江塚も予の主張と同様なりしものの如し。因て今晩生徒と面会し（青山が）其の模様によりて明日中に解決せんと話せり。又生糸売込問題に関して日米商社へ問合せり。午前中組合にて午後銀行へ出勤す。木下信来り、通貨の話す。原幹事長来話して伊那社問題を論ず。

受信　市瀬朝彦ロンドンより

九月四日　水曜

曇雨。組合支所に行き青山専務と相談して、昨夜青山が生徒と懇談をなしたる状況に付て聴取したる状況に付て、果して生徒間の空気、＊沢＊吉を罰せざれば止まさるの況ある事を察知せるものゝの如く、遂に＊沢＊吉に諭示して、試験課帳簿訂正問題とは切り離して処置する事に決し、依頼解雇の手続きをとる事に決せり。役場に村長を訪ねて江塚銅像問題を話せしに、彼は稍昂賁したる面持ちなれば諄々と説き、問題は小なれども波及する処大なれば之が為ニ村内ニ大波を起さんとも測り難し、よつて妙見山を解放して遊園地とし将来、碑、銅像等の建設地として公開するの方途をとられたしと伝へたり。彼は予に此問題は如何なる反対あるも押切つてする考へなるやと問ひたるを以て、然りと答へたり。次て落木問題ありたれども専務に譲り、直ちに大平重太郎を訪ねて、村長に話なかりしを詰し、是非共村長に話し置かれたしと申込みて本所に行き、銀行を休む。

予記　本所に午後居りて種々事務を＊沢問題を専務に委して帰る。大平来訪し、父と銅像問題を協議す。

発信　宗像宗吉、教婦の礼。

九月五日　木曜

雨。銀行を休みて生徒の慰撫ニつとむ。生徒特に第一工場の生徒不安の念強く、＊沢＊吉と＊村＊キと関係あり。為に彼女の点数を改ザンしたり。其の使としては恩田が行ひたりと云ふ評判高く、＊沢を辞せしむるより外なしと決したりしが、朝＊沢来訪、懇々、彼に辞職をすゝめたり、彼か退職金の事は心配し納得して去りたるが、山本より追数帳を借りうけて朝一工場に行き、女工に対して帳簿改ザンの甚しきを告げ、自分は犠牲となりて辞職する等告げたれば、工女は皆戦々競々として御祭サワギの如く思ひ居れり。中には悪化したるものありて罷業を企てんとするものあり。仕事は仕事、主張は主張と区別してなすべしと懇々諭せり。併し専務、青山、修養上の関係より、工女に威なく如何に成行やは注意をなしたるも、＊沢を辞職せしむれは万事終る事と思て此程度にて治まる事と思ひ居たり。

九月六日　金曜

雨。組合支所に行きたるに本松の生徒罷行を始めたりとの注進に、電話にて田中荀一郎と交渉して後現場に行きて見たるも、既に田中は来組し慰撫をなしたるも続いて青山専務来りて慰撫し彼等と懇談し居り、辞職する事に決したり。次て今夜幹部と懇談したき由聞きたれば

其の覚悟して居たり。要するに右の罷業せんとしたる事は、昨朝＊沢＊吉来組し工場に於て工女ニ対して悪口を云ひ釈明的の言を吐き、此の帳面は単に＊村＊キのみならず、之を検すれば猶種々の問題生し古参工女の賃銀を増したる事になり、予は此犠牲となりて遂に辞職の止むなきニ至れり、此の主導者には必ず酬ゆる処あるべし等、悪口を言ひたれば如何にせんか恐ろしくあり寄て話し居たるもの丶如し。新聞屋も聞きでかし来たり。如何ニせんかとも思ひしが筆を止める事も如何かと思ひ、信濃時事の岩崎より電話ありしが掲載方を止めさせたり。銀行を休みたり。

予記　種々の問題惹起して心配せり。夜全員を支所に集めて一場の話をなし、代表を出して意見を聞く事とし、田中、江塚、青山立会ひ専務室にて代表者と話し六分の了解を得たり。

九月七日　土曜

雨。組合へ出勤す。午前九時より役員会を開き販売に関する件、工場の現業員カク首問題等につき報告し、且又事務員の更迭の件は今暫く見合せ慎重に考慮したき旨を諮りたり。＊沢＊吉が現業長として不信認を生徒よりうけ、遂に辞職せしむる事の顛末を理事に報告せり。理事会終了後支所ニ来りて田中、江塚両氏と共に休盟事件ニつきて調査を行ひたり。関係の人々を一一呼び出して詰問せるも、的確なる証拠を得るニ難く、＊沢が原因をなせるが如くは見ゆるも尚確たる事なれは如何ともする能はず。＊沢も辞職せしめたれは、問題落着したりと見たり。現業員の更迭を行ひたり。

九月八日　日曜

雨。午前中家に居て机上の整理を行ふ。組合へ午後より出勤して田中、江塚と共に試験帳改ザン事件の取調を行ふ。一人一人事務室の裏座敷ニ呼ひ出て詰問したるニ、大体の見当は付きたるも確証上らず、夜迄続行したるも大体の調査は出来たるを以て是以上進るにも及ばざるべしとて帰宅す。工場の人心も落付きたり、信濃時事新聞ニ大事ニ至らんとしたるも取静めたるが如き記事出てたり。

九月九日　月曜

雨。松本工場試験場長宗像氏来組すと云ふ電話ありたれは、宿所常磐館へ朝訪問す。午前七時半なり。暫く話して宗像氏を迎えて自動車にて松尾組合へ案内す。宗像氏は原料悪けれれは八十五点以上の操糸は不可能なりとの論者ニて、且又工女の前等にても幹部の悪口を云ふ男にて思ふ事を其儘に云ふ性なれは、現業員及教婦ニ対して一場の操糸上の話聞きたるのみにて一般へは講話を乞はず。昼食をミドリに案内して青山と田中と予と宗像氏を囲みて午後四時迄談して再ひ第一場へ往きて其の工場を巡視したり。彼の評に曰く、工女の腰掛高く安定せず、余暇あつて却て不成績なり、蚕品種は問題にあらす、唯糸口の細きものを選ふべし、上簇の時は強いて強反を上騰すべからず、等の話あり。夕刻迄本所に居合し彼は帰り、田中、青山と午後七時迄話して帰る。

予記　久次郎昨夜死せりと云ふ。

受信　朝より両北原聯会合出席票送り来る

九月十日　火曜

風雨激し。直に銀行へ出勤す。両三日欠勤したれば如何なる事やあらんと思ひて出勤す。別に多忙に気合もなく平常通り事務を見て、午後五時帰宅し投網の修理を行ふ。秋蚕近頃迄気候よく一般ニ成績もよく不成績の話は聞かさりしか、毎日の雨天にて白殭蚕（はくきょうさん）〔蚕の病気の一種〕等も気付はれたり。今の処、食延時ニ入りて冷湿の為好結果を

得られさるべく気つかはる。
神気昂奮せしにや、顔面神系悪しく働き、気六け敷く人を見ては臆せるもの丶如く思はれたり。
横田先生へ十月六日は軍人会の会合あれは講演を早めるか又は延期を乞ふ旨私信にて申送る。
発信　横田秀雄

九月十一日　水曜

曇雨。霖雨。晴れんとせしも午後より降り出し止まず。組合支所に行けば□□□千葉式具合悪しく一時作業を休み、又其後クラッチ又具合悪しく修理して漸く事業に支障なからしめたるが、本所の方にては昨日の大雨ニ九十九折井、及毛賀井、両者共破損して給水出来ず、遂に作業を休止するの止むなきに至り、午後二時頃迄休止せり、と聞く。銀行出勤前聯合事務を訪問して西晋一郎博士の「近思録」の講義を一時間計り聞く、漢籍古典の講義を聞けは心行くばかり面白けれとも、時間余裕なけれは割愛して銀行へ出勤す。放課後頭取より営業上の話の末、頭取室より営業場の方へ出する様話あり。突然なれは驚き居たるも、後より頭取の意中も察し如何にすべきやと考へたり。

九月十二日　木曜

雨。霖雨。毎日鬱陶し。秋蚕一般に好成績なりと聞きしも此天候にては宵の喜と化せんも測られず。支所を経て上飯、聯合事務所と松本工業試験所宗像及田村両氏の生糸に関する講演あり。伊沢と出席す。講演は伊沢に任せて銀行へ出勤せり。信産銀行ニ萩元常務を訪問して金利問題に付意見を問ひしに、信産としてはまとまらず百十七は如何と問はれたれは、当方の意見は両行にて暗黙の間に行はんと、然らば信産の方も考究して後申出すべしとの事に、辞して聯合事務所に原を訪ひ、講演にも顔を出し警察署長と会見し、下伊那ニ於ける四次検挙後の共産運動の状況及作興会の活動等ニつき打合をなして辞す。放課後中原来訪し、明十三日の作興会幹部会ニ付議すべき事項ニ付協議せり。野沢刑事巡査直行。
発信　長尾大学

九月十三日　金曜

組合支所より銀行へ出勤す。

九月十四日　土曜

晴。組合支所より銀行へ出勤。父より八幡様へ奉納する額面を小笠原長生子爵に御願いして来るべしとの命をうけて、上京の序に其の用件も果すべく夜行ニて上京する事にせり。小笠原氏へは予め手紙を以て頼み置きたり。用意して夜行上京す。伊那電車も此十五日より時間を短縮し、飯田辰野間も三時間を要したるものを二時間にする事となれり。鉄道省も中央線時間を短縮し夜行中時間の種々に変更せられたるを見る。夜行汽車中冷気加りオーバーを着たるも冷々し。

九月十五日　日曜

晴。朝新宿着、直に東中野迄引返して横田秀雄氏を訪問したるに、鎌倉ニ行き不在、明日夕景ならでは帰らずと云ふ。然らば明日夕刻電話にて都合を問ひ合す旨を告けて直に出づ。神田駿台荘へ入る。夜甲府より老夫妻客入り来り坐を占め眠る能はず。眠気と疲労出てたるも、午前八時より講義始まる模様なれは、兎に角社会局ニ於ける教化団体聯合会の講演に出席し終日高楷博士の講義を聞く。高楷氏の話は実に面白き説なり。初めて高楷博士を見たるが、温容ニテ其の説も若々しくよき学者なる様感せり。殊に氏の説に曰く、教化事業に当るものは歴史に通せさるべからすとの説は最もよし。講習会例の通りなるも、

其の熱のなき只徒に自分のなす事を社会ニ演説せんとするもの又は対価を求めんとする教化者の群にて面白からす。始めより見学とか遊ぶ事のみ考へ居れり。此の如き連中に何回講義したりとて教化の実績挙らさるべし。終日此高楷氏の講義を聞き、最後ニ下村文部省社会教育局長の話ありて分散す。東京の模様は亡国的傾向の顕著なるを見るのみ。泊り合せたる小西町長と、日に亡国的の傾向ある事を話し合す。売勲事件、朝鮮事件等大官に関スル事件盛なり。世道人心益々危し。

九月十六日　月曜。

晴。駿台荘の朝早に目を覚し静座せり。皇居に対して静座、気清々し。小笠原長生氏へ依頼して八幡様へ掲ける額の揮毫を乞ふべく幡ヶ谷の小笠原邸迄行く。新宿より電車に乗りかえ初台にて下車。右曲りて甲州街道ケヤキの門前の木ある邸にて訪問したるに、既に華族会館へ出頭したりとて不在。執事取次に出て土産として初夢（二円）、松尾村史及地方画ハカキを贈り、一尺三寸の（木彫にすべき）紙を添へて揮毫を頼みたり。執事世話なく引受けくれたり。予め電話を以て紹介したるに、初めは其の様なものは引受けすとの答なりしも種々話の末、それは書いて上けるから紙を届けたらよいとの事に紙を買ひて持参せり。次て社会局ニ講義を聴きに行きしに、誰やらん面白くもなき常識的の思想論なれは直に出てて東京駅より三越等を見て宿へ午後五時帰る。千葉上京し居り。夕食を喫して共に語り夜に入りて銀座を散歩す、中谷に面会す。

予記　文部省ニ田中学芸課長を訪ひて映画材料の貸与方を頼みたるに、十月初旬に間に合はすとの事なり。督学官稲葉氏を訪ひて仲介してもらいたり。

九月十七日　火曜

晴。駿台荘に於ても朝は冷気を覚ゆ。東京の空も亦秋来るを感ず。午前七時頃中原及松尾精一両氏着京し来泊したれは朝食を共にし、外出の案件等を打合せて、先つ第一に上野に於ける美術院展覧会を見るべく自動車を上野に駆す。其の展覧したる画は時代を代表するもののみにはあらされども併もよく時代を表はし居れり。疲労の跡、迷□の形、絵画ニ表れたり。平凡なる作品のみなれとも明治四十年頃の如き興国の気分表れ居らず。二科等の展覧会もありたるが一層甚しき左傾的のものゝみ多しと聞きて省みもせで館を出づ。午前十時半約により明治大学にて横田秀雄先生を訪問し、来る九月二十九日是非来郡を乞ひ度旨申込みたるに、先約あれは其の方を先づ問合せ明日再ひ会見して都合を付くべしとて分れ、直に麻布三聯隊に永田鉄山大佐を訪ひたるも休みにて不在。電話にて航空本部小笠原数夫大佐に対する用件を頼みたり。直に航空本部に小笠原大佐を訪問し十月六日総会（軍人会）に飛行機三を遣せられたき旨申入れたるに、十月六日にては都合悪けれとも十月中旬ならは何とか希望を充さんとの返事なれは、兎に角頼むとて直に銀座玉屋にて予に贈らんとせる（聯分より）盃を見る。後日本新聞社に綾川、中谷両氏を訪問し、レーンボウにて夕食し分れたり。予は千葉と共に午後十時の汽車にて帰郷す。

九月十八日　水曜

晴。午前六時辰野着。箕輪屋にて朝食をしたゝため一時間遅れて飯田に入る。千葉とは箕輪屋にて分れたり。銀行へ出勤して午前中に働き午後一時より開かるべき作興会幹部及町村長会幹部と打合せ会に出席す。北原（阿）、（源）、小西、原、日刊二新聞記者にて、国民精神作興を公私経済緊縮運問題ニ関し、下伊那郡として如何なる方法を講するやと云ふ事ニ付て協議研究せり。国民精神作興ニ就ては東京に於

て中原とも打合わせたる三ヶ項目を打ち合して協議に付したり。尚経済緊縮に付ては、県より予て示されたるものに尚加減を加へて原案を作成せり。午後一時より夕景に及ひたり。尚市瀬繁上飯し来れは組合（聯合分会）に関して東京に於て運動したる模様を協議す（即ち航空本部ニ関するもの）岡田、松島も来り会を終つて共に東精軒に於て夕食をとり散す。

九月十九日　木曜

曇少雨。組合支所より銀行へ出勤した。仁寿生命保険員と松本同支店長と二人来行し予に保険を勧めたが断つた。下田から東京中原よりの通知によれは横田秀雄氏が来飯して呉れる事に決したとの報あり。猶軍人会総会に関しては軍楽隊其他を交渉したが、一方よければ一方悪しく遂に大会期日は変更せんと云ふ事にしたとの事あり、猶市瀬よりも電話を以て右の旨相談ありたるに付、予の意見として止むを得さるへしと申し送りたり。尚市瀬来飯する由聞及ひたれは午後六時迄待ちしも見えず。帰宅せり。象山の書幅を父に見せ其真偽如何を諮りたるに真正であるもの丶如しと説あり。安田支店長より贈られたる菓子を子供等に分与し嬉しかり居るを見る。父母に寒天ニ向へはとて東京より買来たる毛布二枚続（一枚十八円）を土産として贈りたり。売勲事件、山梨大将収賄事件等面白からさる事多し。

九月二十日　金曜

曇雨。上茶屋の石屋花井来り住江及尭甫両人の石碑を建てる筈なるも、朝待ち居りしに来りたれば建てる所を探し両人の墓石並へて建てたり。秋風冷々しく吹き亡児の石更ニ冷し。

九月二十一日　土曜

雨。豪雨降りつ丶きて鬱陶敷事甚し。組合支所に到り青山専務に会い銅像予定地仮丁はり予の不在中にするは面白からさりし旨を告け、工女賃銀修正の件につきて状況を一見して後、妙見山北にある銅像予定地の丁張の具合を見て後銀行へ出勤す。正午過なり。例の通り事務を見て午後五時帰宅す。雑誌『祖国』及中原氏の作興会事業報告書を一覧し、起源及其の沿革事業等につきても尚付記せられたき旨心中にへたり。松本の禁酒会丸山浦治郎より、本月十四日『大衆新聞』二面記事に、予が禁酒会の如きは共に語るに足らさるものなるか如く論したりとて其事実なるやを問合の手紙来りたるを以て、其返事に「貴翰により十四日の『大衆新聞』を見たるに予が記者に話したる事もなき事が掲載し居り何かの相違ならん」との返事を出す。

発信　返事　丸山

受信　丸山浦治郎問合

九月二十三日　月曜

晴。暖。朝龍門寺和尚来訪し常信院の山へ茸狩に誘はれたり。組合へも行かさるべからす、且又法事の障紙張もせさるべからずにて如何かと思ひしが、午前中なれはとて誘はる丶か儘に共に行く。常信院に着て松尾村を見渡せは其の土地の平坦なる人家の立派なる裕福なる村の如く見ゆ。山へ入りしが人のみにて茸なく雑茸も少し。因て何物も不獲して山を下り、老僧が渋茶を点て歓待せらる丶を喜ひうけて帰る。午前十一時なり。

午後組合支所に行きて青山専務と話し合せて秋繭受入に立会い三百貫程を受入れて帰る。明治天皇御製を拝誦す。

ひろき世に立つべき人はかずならぬ
　　事に心をくだかさらなむ

九月二十四日　火曜

石屋来り墓石の前へ地紙型の水指穴を穿つ。銀行へ午前九時より出勤し午後一時村会に出席す。村会にては伝染病院の経過報告あり。又大平神官より村長宛呈出したる書面にして、組合より申込みたる社地へ銅像を建てさせる事の可否に付て村長の意見を問ふ旨の申告に付き、村会に諮問する提案あつたれは、種々の議論出て田中よりは大体賛成なり、只組合の意志不明瞭なれは云々の言ありし故、之を正す為、惣代会の決議録をとりよせ之を示して組合の意見の不明瞭ならす銅像一基を贈呈するものなる事を声明す。よつて最後、竹村より不賛成ならされとも将来物議を起さゞる様注意せられたしとの事あるのみとて結局其意見に従ふ事となりたり。

九月二十五日　水曜

曇。午前中大沢女史来訪されムスコの話あり。組合へ十時頃行き青山専務と種々話して銀行へ行くに、銀行にては活動映画の入場券を新聞記者売りに来りしか一枚も買はずハネ付たり。放課後大雄寺に行きて和尚を法事に聘して帰る。丸山浦治郎なるものより大衆の記事を取消さずんは第二段の手段に出す云々の脅迫的文句申来る。

役場に本塩助役を訪問し銅像建設に付意見を正せしに、村長としては昨日村会に諮問せし如く氏子惣代へ通牒するのみとの事なり。然らは此後に村治上に問題を起さゞる様にするのみと、併し将来の事は計るべからず。

受信　丸山浦治郎

九月二十六日　木曜

雨。午前中より土蔵より客道具をとり出し客の用意せり。膳椀等上下二通り出すために雑用多し。午後一時支所に於て理事会を開きあれは出席す。仮渡金額決定につきては六円と決したり、尚銅像建設に付て経過を話し、且又二十四日村会に於て村長より村会に諮問せられたる事に付て村会の情況を報告し、其の大体の様子は大体異議なきも将来問題を起さゞる様せられたしとの事を村長に答へたりとの旨を報告し、今後の対策につき談す。珍しく議論沸騰し、市瀬の如きは村長かそんな事を村会に諮る事は不条理なりと云ひ、田中は対策等はなし、以前の通りに進めはよし、若し支障起らば江塚氏と協調して進めばよからんとの事を云ひ、吉川順二氏は予の説明に賛したるか如き、稀に見る議論あり。結局来る二十八日午後一時銅像委員会を開きて之を諮る事とせり。帰宅して法事の用意す。

予記　近来大官にして収賄するあり、官吏の腐敗其極に達す。赤化、社会主義者等はよき口実となるものなり。自ら先んして精神作興を説くもの此の如し。天を仰いて長嘆息せすに居られん。

某大官起訴云々の新聞出て小川氏の身辺危しと取沙汰あり。

九月二十七日　金曜

晴。夜来の雨晴れて秋日にうらゝかなり。午前九時出入りのもの膳を出すべき用意し家族及び出入のもの二十名計り膳につく。

次て親類客来り寺の僧侶も亦来りたれは其の応接接待にて忙はし。料理人の義勝なり。午前九時の膳の後、親類客来りたれば之より読経を行ふ。式終りて直に墓参をなす。墓石新に建立し秋日和に此石の下に吾愛児の永に眠れるかと思へは、其の夢の冷々しかるべき事も思はれて新愁胸に湧く。線香を手向け瞑目して拝す。墓参後座敷にて親類及猪佐雄、中島、順太郎の三者を加へて膳を出す。饗応後精進口として鯉の刺身等にて復一献飲む。未た秋蚕全部片付きたるにあらずして一般は忙し。耕地又は道送りありて猪佐雄等は正午頃来る。

受信　石原義一、慶應病院より
小川前鉄相起訴されたり。

九月二十八日　土曜

晴少雨。寺へ昨日の礼に廻るべく菓子一箱及金三円を返礼として龍門寺に持参したり。次に上飯し銀行に立寄りたるに、大平の居残り居りて午前中銀行用務を実行したり。次て午後より大雄寺に詣で金五円と菓子折を返礼として贈る。午後一時より組合本所に於て銅像委員会を開き出席す。氏子惣代よりの委員としては竹村順一氏一人のみ来り、大幣社司に銅像建設地借用願書を差出す事に決し其他協議の上散会し、夜に入り修養会役員会開かれたれは乞はるゝまゝに臨席す。運動会を八幡より大島迄電車にて行き発電所を見せてもらふ計画を生徒に諮問せり（専務より）、併して雨中を帰る。

禁酒会機関雑誌（曙）に予の舌禍（?）なりとて、嘗て『大衆新聞』が予を間接に攻撃せんとして掲載したる記事を信して攻撃的筆を弄し森本州平氏に呈するの記事掲載せられたるを見る。

九月二十九日　日曜

朝八時十三分飯田着にて横田秀雄氏作興会の為に来講せらるゝに付、其の出迎として八幡駅より朝七時十四分発にて市田駅迄行き横田氏に面会したり。時に座光寺柵田文一氏も来り迎ふ。蕉梧堂に案内して客座し入る。校友二三名及其他作興会幹部来訪す。聯合事務所に於ては各種国体の催に係る国民精神作興と公私経済緊縮に関する打合会あり。北原氏欠務したれは小西飯田町長其の協議を進行せしむ。予は横田氏の接待の為蕉梧堂に居残る。午後一時より商業学校講堂に於て横田氏の講習会あり。組合に帰る。講演は難波大助に関する事にて、大助の家族より其学其況遇と思想に及び獄中生活より其の心理状態に及ぶまで語られたり。講演後自動車にて天龍峡ホテルに至り夕食を共にす。柵田氏も同行す。横田先生八時の夜行にて帰京の筈にて見送りて午後九時帰宅。

九月三十日　月曜

雨。銀行へ出勤す。組合へも顔を出す。

十月一日　火曜

晴。銀行へ出勤す。聯合事務所に至り作興会務に付、下田史郎に命して宮沢募集員の銀行に来るべき事を命じたり。午後放課後銀行野球団と座光寺共進社野球団との試合あり。之を見物して帰る。沖の島に於て営業飛行ある筈なりしも一機来航し来りたるのみにて此催し沙汰止みとなる。

組合休みなれは伸々したる心地せり。竹仙堂山地慶次郎来訪し一泊せり。彼は父の世話て前沢より後妻を迎えんとして其話に来るなり。

十月二日　水曜

晴。上伊那龍水社に於て県下組合製糸大会あり。松尾組合より出席す。附近下伊那の組合製糸も亦出席し居り。龍水社十五周年の祝賀式もありて其々引続き行はれ農蚕に関する書画の類陳列せられたり。特に江戸繻は数多く陳列あり。宮沢要次郎と共に之を参観す。式後協議問題あり。且又、六三銀行黒岩氏の金解禁問題に付講演あり。黒岩氏に面会せり。

大会後三井物産社石炭部の招宴マルヤ別館に於て行はれ之に列せり。代表して礼を陳へよと迫られしも、地元に任してひかえたり。午後八時八分にて原、飯野其他組合関係者と共に帰宅す。此日飯田町銀行団にては風越プールに茸狩を催したるも欠席す。

発信　春日賢一、曙記事に心配せり

受信　春日賢一、右返事
欄外　伊勢神宮御遷宮式行はれ一般に休日なり

十月三日　木曜

曇。小雨。朝八時組合に出頭したるに諏訪郡落合村組合員視察の為来組し之に応接せり。次て横浜奥村商店大井氏来訪し、旧取引を温められん事を求められたり。龍丘岡村同伴す。昼食を青山と江塚、ミドリへ同伴せり。次に鳥取県聯合会員専務理事倉繁氏視察の為来組し、之に応接して遂に銀行出勤の時間に遅れたり。因て銀行へは本日欠勤の旨を告けて吉川亮夫を訪問し、銅像建設地に就て懇談せり。彼が組合の方より話なしと云ふに、害を防がん為なり。経過を話し、若し此儘スラヽ、経過せされは種々の問題も起らん事を恐れてなり。八幡駅に駅長鈴木を訪問して大島迄遠足の電車賃を交渉す。
再ひ組合支所に帰り横浜日米商店の取引上に就て注意を与へ、為替金六〇〇円を六五〇円と改正する事、日歩二四を二二とする事、計算書を荷口毎に計算する事、等を命して其の実行を市村に命す。
発信　西井与平、写真送る。

十月四日　金曜

雨。組合支所に行きたるに各地より視察団来組し居りたれは一応の説明を試みて後、飯田へ上飯す。

十月五日　土曜

曇晴。朝組合へ行き、青山専務と銅像建設の件につきて打合せたり。氏子惣代会の決議により「個人所有となれは其建設地は貸与出来難き旨」公文を以て通達ありたるに付、今後如何にすべきかを話し合せたり。近来、銅像建設地決定に付批難の的となれるが如き憾あり。予か心中を知らさるもの多きか如し。予は決議の通り実行して銅像の建設は組合にてなすべきものなるも、其の建設したるものは之を江塚に贈呈すべきものたる事は種々決議によりて明なれは、決議の通り実行して可なるものなるも、青山其他田中等は其の決議に拘泥せすして之を組合の有として建設せんとするの志あり。社地は容易に借り得るものとして考へ居るもの、如し。故に之を如何にすべきか大なる疑問にて、之を打合置かされは将来面白からず。遂に青山と打合せしが青山は惣代会に諮れと云ひ、予は返納する手続をとらさるべからすと論せり。遂にまとまらず去り。日米会社差押をうけたる談を聞く。
予記　午後出行す。電話にて竹村順一に氏子惣代会の模様を聴きしに、予が冗談に云ひたる氏子惣代にも責任ありとの言を紹介したりと聞く。竹村も亦予の心中を誤解せり。
夜、六三銀行塩川賢三氏昭和倉庫へまわり、松沢茂雄支店長就任したる銀行団の歓迎会あり。田代（新栄支店長）来訪し、一時間計り話す。

十月六日　日曜

晴。秋来霜雨多かりしが全く晴れ渡り、軍人会総会には天佑の秋空高き日なり。組合より出荷したる生糸の問題に付き青山専務と打合すべく手紙をやり、午前七時前支所に於て会見すべく待つ。専務と日米会社の差押云々の件を議して、万一如何なる事ありとも決して損害の多大ならざる事を確めたる後、聯合分会大会に出席す。第一会場は、城下運動場にて北面して台を設け軍人、青年訓練、中等学校等参加し、総会を始め分列閲兵等あり。町田大将、市瀬少将来会せり。大平の次に予は銀杯壱組を贈呈をうく。飛行機来空し、二周せり。午後より第二会場今宮原に移る。来賓風越館にて昼食せる後、招魂祭に移り、軍楽隊の奏楽あり。神仏の礼拝あり。遺族の参拝あり。式後町田大将の

訓示あり。聯合分会長市瀬の祭文、訓示等皆国難来の警告なきものなく、一般国民の緊張を促の語交々に出て、大なる盛会なり。予が総会を主張し予算を作製したるもの皆意〔これ以降、予記欄へ移動〕の如く行はれ殊に其の会の進行一の渋滞なくよく行はれ、一般の会員に満足を与へたり。総会及ひ招魂祭終了後軍楽隊の奏楽会、今宮に於て行はれ、猶ほ又三霊境内に行はる。仙寿楼に於て慰労宴あり。出席して後東精軒にて斎藤分会長訓練所教官連に夕食をオゴリて九時帰宅す。聯合分会の総会に於て表彰をうく。

十月七日　月曜

晴。朝、前沢米子葬儀に出立して（窪田武雄と共に）、飯田駅頭にて町田大将帰京の見送に接し、窪田と分かれて一時間待ち合せて、大将及少将を伊那田島迄見送る。沿道、町田大将夫人に種々の説明をなす。町田大将、市瀬少将共に天竜峡ホテルに宿泊し、飯田町長原等之を送る。前沢にては午後二時出棺葬式ありて、式後一泊せすして帰宅す。電話にて青山と組合生糸出荷の件及十日の役員会打合を行ふ。昨日の軍人総会に関して疲労したれは、帰宅後休養せり。父役場行。増恵も亦女子会へ出席す。

十月八日　火曜

雨晴。前沢に祖先の霊祭あり、父の名代として出向す。銀行、組合其他諸用あるに係らず父の命なれは行く。丈雄及橋爪の婆も同行せり。霊祭は下伊那に於ける親戚は上記の者等の如くにて、他は昨日の葬式に列したるのみなり。前沢へ向ふ前に銀行へ立寄りて事務を見、復た帰途にも立寄りて事務を見る。

門内の柿沢山熟したり。米作は稲の出来は申分なき出来なりしも、九月中旬冷湿なりし為、晩稲立穂多く結実充分ならさるもの多く、本年は豊作は願はれさる模様なり。風呂修築の職人本月五日頃より来る。

受信　伯林より市瀬氏

十月九日　水曜

曇。組合支所を経て銀行へ出勤す。

十月十日　木曜

雨。朝九時より本所に於て理事会あり。蚕品種問題を協議したるに、本年製糸部委員会に於て協定したる支欧日支二十銭、日欧十銭（一貫目に付増金）を惣代会に付議する事、及技術員井深、佐々木を参加せしめて意見を聴きしに、井深の説は個人定粒なれは単科の揃ひたるものなれは、一粒のテニールの如きは問題に非すと説き、佐々木は各品種毎にセリプレーン率て配分する如くせば可也と説けり。然れとも既に委員会に於て決したれは、此原案を呈出する事とせり。次に、銅像に関し神社より公文を以て照会来れるものを読み上げ、如何にせはよきや重大なる事なれは諮問を計りしに、吉川順次郎と田中筍一郎、市瀬牛太郎との間に激論あり。即ち吉川説は、惣代会の決議録に基き江塚氏より返納（？）して後総代会に計るべきものなりと云ひ、田中は返納に及はす、贈呈したるものに非すと説き決せず。兎に角、惣代会に付議して決する事として後、午後三時銅像委員も打返して台石を見付けて待つ事とし、銅像建設費に付ても惣代会に諮問する事に決して散す。干燥終了の宴あり。本支所に顔を出す。

受信　千章

十月十一日　金曜

曇。組合に行き青山と左の通打合。

一、江塚より銅像建設贈呈等の問題に付ては一任をうけ置く事。

二、来る十四日南向発電所遠足に付き、伊那電と交渉を遂け置く事。

小学校に運動会あり、役場に各団体耕地委員等の集会あり。国体観念の明徴、国民精神の作興、公私経済の緊縮等につき相談会ありたるも、会地扶業組合視察に理事六、七名来組したるに付、之に応接して遅れたり。後銀行へ出勤して事務を見る。横田秀雄先生より揮毫に謄印し送付してくれたるを頒布せり。聯合事務所原、中原等に頒つ。中原来行し、十三日午後一時より顧問及総会委員を集めて慰労会及今後の対策等を議するに付、来会され度しとの申込ありたり。朝、父か久治郎の葬式に明十二日に行くべし、との命ありたれは多忙にて義理迄もするは甚た恐縮なり、と云へるに対し父大に怒りたり。予か銀行に出勤して小賃をとって自活しつつあるに対し作興会組合の事務等中々多忙なり、故に父が多忙なれは、近隣の義理たけは俺かしてやるから思ふ儘に組合銀行等の為に尽くせ、と云はるれは有難き極みなれとも、義理より各種団体の事迄中々に尽し難し。

十月十二日　土曜

曇。冷気となり袷を着するに到れり。

銀行を休みて組合支所に午前中に行きて事務を見る。午後、市場久治郎の葬式ありて会葬せさるべからされは、会葬して親類組合の間に伍して種々世話を見たり。天理教の葬式にて神葬なれは賑なる葬式なりし。終わりて龍門寺に無尽ありて出席す。松江大元氏も来会したるが、多く談するの機もなく別れたり。粥川医師来りて伊勢参宮の状況を語りたり。夜十時頃迄話し合ひて散ず。

十月十三日　日曜

晴。組合本所へ出勤して事務を見る。午後四時迄、持分配当を止めて出資配当を如何にすべきかに付て研究せり。南向村農会より会員三十名計り視察に来組し引見す。下平勇も同行せり。組合より午後四時出て丶、鼎組合に小林専務を訪問し、直に持分配当より出資配当に変更したる時如何なる手続をとりたるかを問合せたり。併して後、工場を一巡し、釜場を見て後、午後六時聯合分会にて総会慰労会に出席す。仙寿楼に於て開かれ大平、原及予其他若干名来賓として招かれ、新聞記者も三名計り来会したり。宴開かれ最後迄居残りて痛飲す。作興会と軍人会との連ケイに付ても充分話し置けり。夜十一時帰宅。

十月十四日　月曜

快晴。午前九時十五分発八幡電車にて、組合製糸部生徒三百三十名及理事七名及男工等合せて約三百五十名、南向発電所見学及台城城址へ遠足に出向す。天気快晴にて生徒等喜ひ勇んて電車に乗る。中には子供を背負ひて迄も此遠足に参加したるものもあり。

大島駅下車して大沢と予とは後を見守りて行く。発電所に於て其の発電の状況を調査し見学して昼食し、台城に出て休憩。午後四時五十分山吹発の電車にて帰る。八幡社祭典なれば参拝して後、理事連中と共に鳥清にて晩食を喫したり。市瀬牛太郎と木下千之助との議論小児戯の如し。

父、上柳喜右衛門に落木三十材程周旋してやらんと思ひ之か命をうけて行きしか、既に其落木は全部組合へ搬入済の後なれは、電話を以て其旨三原屋へ伝言を頼み置けり。帰宅後父に其旨を報告せしに、父大に怒り、父の命を軽んするによりて此の如き事を生するなり。平素客来る時と雖も、客より後に父に挨拶するは親を思はさるものなり等小言を云はれたり。併も予か種々の公職に在りて多忙なるに拘らす、家族を以て父個人の命に服せしめ専政的になさんとする父の常なる態度より出てたるものなる事は明なるも、父の機嫌を害したるはよろしからず。〔省略〕。

社会の今日　軍縮会議日本委員定まる

十月十五日　火曜

晴。組合へ立寄らすして直に銀行へ出勤す。聯合事務所に下田を訪問し、作興会映画宣伝に小飼師を頼む事、及紀念出版予約募集につき、宮沢をして募集締切各村別に表を作製せしめて呈出せしむる事を命したり。又北原産業部会に持分配当廃止に関する定款変更並に計算等につき打合を行ふ。

又青山専務と打合せ、台石を探しに鼎出張の筈にて、鼎村長に交渉したるに不在なる由にて、二十日頃迄延期する事に決せり。朝、安江浅次郎来訪して皇室中心にて新聞を作るから口を持ちくれ、との事なれは、遂に一口を持つ事とし、銀行にて証拠金五円を渡したり。「伊那の中路」及「我心」の予約に応募せり。

増恵小脳に異状ありとて発熱もなけれとも気分すくれす引籠り居りしに床上けて起き出づ。父牧内及滝沢行。

予記　田原氏へ横田先生書額一枚贈る

発信　田原肆郎在飯中の礼。矢田行蔵、急進無産国民党の発展を祝して

受信　千章

社会の今日　九月中の長き霖雨と冷湿の為米作気つかわる

十月十六日　水曜

晴後雨。山本、＊＊＊方売立ありたれは、千章と約して見物に行く事としたり。午前中千章来訪したれは之と共に午後二時頃下見の為出張する事とせり。農工B上伊那支店長及同行整理委員来行し、協同社及細田伝に関する打合を行ひたり。午後二時千章と共に山本行、＊＊家売立下見を行ひたるも、其の内欲しきものは大耳の花瓶（銅）及富士形茶釜鏡其他二三のものなりしが、其の買込みを犬塚にも注文せず山本兄に頼み置きたり。

其注文値段安けれは、或はとれぬやも計らざれとも御取持の意味にてたのみ置けり。山本、石曽根に帰りて、千章と骨董談をなす。余り高価なものなく、＊＊の二枚折屏風最も高価と見られたり。

十月十七日　木曜

晴。山本に一泊す。＊＊＊＊せり物あり。千章と共に前日下見を行ひしが、其のせり立今明日なり。千章に＊＊の屏風をすゝめ置きしが、彼決意せず。千章は尾賀本へ兄と共にせり立て見物に行き、予は午後一時より組合に惣代会を召集し置きたれは、出張する為午前九時辞して帰る。組合の惣代会に於ては、明年度飼育すべき春蚕種に対する割増金問題、及銅像の建設費等にて殊に後者に就ては議論もあり、贈呈云々の件もあれは、如何に成行くかと心配せしが、案外平易に運はれたり。惣代会人の集まり宜敷からざりしも、漸く半数以上に達し、前者に於ては議論ありとも、後者は殊に平穏裡に進行せり。終りて後夜に入りて帰宅す。

十月十八日　金曜

晴。直に銀行へ出勤す。大平と重役会開催日に付打合せをなし、午後二時より聯合事務所に於て、県工場課の発案に関する工賃算出方に付、工場課の主張としては、賞はよけれとも罰を課するは宜敷からず、賞罰制度を改正して之を最低賃銀以上に改正すべし、とて三四の案を示されたるに付、之を産業組合製糸の会合を求め、清水伊那社の議長となりて討議せり。予も亦之に参加せり。然し委員を挙けて調査する事となりたれは、其委員に選はれす、山本行の用もあれは山本へ行く事にせり。信作伊勢より急に帰り来りたれは、兄弟姉妹を山本に召集

して兄弟大会を開ん事としたり。予は中原氏と作興会に付、十一月十、十一日の教化国体聯合会出席の件其の他、打合す。又清水原蚕種所長に展覧会寄附金若干を承諾する旨返答し置けり。山本に到れは千章未た滞留し、虎四郎、信作、小石、あち等を合して兄弟全部打集ひたり。夜ふくる迄話せり。

十月十九日　土曜

小雨、曇。山本にて兄弟全部集まりたれば、此機を利して写真をとらんと、飯田へ電話をかけしめて、伊藤写真師を聘し庭先にて撮影せり。父を中心として子供周囲をかこみたり。庭の手入中にて塵を片付けなとして撮影場所を作る。庭鎌来り居りたれは、兄弟つなぎ合して三円計を彼に贈る。＊＊＊＊売立にて千章は蓬平の菊を手に入れ、＊＊の額面等も買入たりとて、話頭主に董談類に向ふ。蓬平の菊を床にかけて観賞し他の頼み物をとりよせて見る。予か注文したるものは、大倉謙富の書のみにて僅に一円にて落札したる由なり。午前中歓談に費し、時の移るを知らず、兄弟相睦み打集ひて歓談に耽るは最上の楽みなり。午後二時千章、虎四郎と共に自動車にて歓を割ひて帰行す。大平県会行、参事会員の選挙ある筈。父＊＊＊に売立道具調に行く。予記　官吏の増俸は大正九年頃三割増あり。其後物価下落し国民一般緊縮を以て此国難に当らんと濱口総理大臣国民に宣したるは、事機に適したる宣言なり。併も官吏にして此減俸に不服を唱ふるは苦々し。自ら進んて辞退する所に官吏百僚の此国難に処する道ならずや。

社会の今日　官吏減俸問題にて喧し

十月二十日　日曜

雨晴。組合支所にて青山と工場賃銀算出法罰減を廃止する方法に付、十九日聯合事務所に於て打合会ありしが、其の後の状況に付打合をなし又大平神官より（銅像を建設し置くことは組合にて保管するの意味なるやとの問）に対して、「然り」と答へたる旨報告あり。諸事打合の上本所に行き、市瀬に定款変更に付其の変更すべき箇所の調査を命したり。又工場安全週間に関して工女を集め、一場の安全週間に関する講話を試みたり。市瀬、田中両理事来組し打合を行ふ。後、毛賀駅より下山村行迄行き、大雄寺良孝和尚も伴ふ。＊＊＊売立あり。両三日前より父上飯し龍＊寺を会場に充てたり。書画骨董品の下見に行、下見の状況見物人は多けれとも、買手は如何なるものにや、不景気なれとも此伊那谷は骨董的気分盛なれは、相当の好果を収むなるべし。銅花瓶寅さに注文せり。水滴、蓬山の山水画、干城の書等注文せり。夕六時、再ひ支所に於て工女を集めて安全週間に関する講話を試みたり。

社会の今日　減俸問題にて新聞を読む。馬鹿気たる話なり

十月二十一日　月曜

晴。保正来り雌犬を与ふ。今迄三疋の犬在りしか、子犬中島に与へてより一匹となる。＊＊＊のせり物、龍＊寺に於て開かれたるも、銀行に出勤したれは午後四時頃より見に行く。父及＊＊伯父等一団となり居りて高値に呼ひ落し景気殊の外よし。予は前日寅に花瓶（銅）其他二三点を注文し置きたるに、何れも高値にて買落したりとの事なり。午後六時頃せり立終了、〔省略〕。＊＊＊も只此売立のみにて安堵せず家政の整理第一に行はざるべからず併して病源を除去する事とせさればやがて一家の破滅となるべし。組合より安全デーに関する打合電話にてあり。

発信　石原、見舞、山本

十月二十二日　火曜

晴。直に銀行へ出勤せんとしに、組合に於て安全週間なれは、午前八時組合支所へ出頭し、午前中大掃除を一際に行ひたり。各部署を分ちて行ひ、人足一人をも頼みたり。組合始めて以来の大掃除にて、清々しくなれり。午後一時半銀行に出勤す。

＊＊＊より買入れたる書画骨董品来着し、父之を併へて見たり。予は清内路蓬山の山水一軸七円半にて入手し、又水滴一個（七円）を落札せり。〔省略〕。皆到着したれは父と共に之を鑑賞せり。〔省略〕。

十月二十三日　水曜

晴。組合支所に至りて口挽の状況及其他を視察して後、銀行出勤。野沢巡査来訪し、警察部長保安課長消防組大巡検の来飯すべけれは、其の鑑賞の刀剣を供せられたしとの申出ありたれは、大平頭取の有せるもの二三点を賞鑑に供すべしと答へたり。次て、大平帰行し、野沢を再訪し、＊＊より買受けためものと合して、警察部長の覧に入れる事として、予は別に用事もなけれは帰宅す。中原、市瀬両氏聯合総会の決算に付来訪したり。大平も在郷軍人会館建設費として寄附帖を差出せし故、之に金額は書かずして名をのみ書きたり。吉川芳太郎来行し、彼は前作夫の清水松太郎の受判をなしたる為、之れか弁済をなす必要あり。金田をして交渉せしめつゝありしが、遂に＊千円を以て勘弁してくれと低頭したれは、種々に交渉したるも、遂に之を以て内済する事とせり。信也へ学資七拾円送金す。＊＊＊にて古銅花瓶三十円にて落札大平より買。

発信　信也

十月二十四日　木曜

晴曇。組合支所に行きて青山江塚両氏と打合をなして後上飯す。此日、大平頭取及金田両人、中央銀行会大会に出席の筈にて上名せり。早朝なれは送らず。組合の仕事も充分には出来す、去りとて又銀行の方の仕事も充分ならず、止むを得さるなり。此日郡下消防組大巡検あり。県より警察部長及保安課長等来飯ありたる由なり。飯田市中賑なり。

世は国民精神の作興と経済緊縮の政府の方針の宣伝行はれつゝあるも、経済緊縮のみ声高くして、御祭り騒きは到る処に行はれ、享楽気分亡国傾向は愈々深きが如し。若し、経済緊縮を唱ふるなれは「借りたるものは返すな」と云ふ様な事や暴利を貪らんとするが如き企多く、挙世滔々として亡国の淵に急転せるものゝ如し。ああ。

十月二十五日　金曜

雨。午前七時小飼純一師を作興会映画宣伝国民精神作興の為に頼みて、大下条、旦開、平岡、和田、下久堅、曽木、神稲等、巡回してもらふ事にしてあつたれは、師に面会し、巡業中の万事を頼むべく常盤館を訪問す。朝早けれは師未た起きず、聞けは昨夜十二時頃漸く着飯したりと。暫く別室にて師の起き出つるを俟つ。

招せられて彼の泊れる室に入り、作興会の映画による国民精神作興の趣旨のある所を話し、天下滔々利を征し人心微なるに当り、よく此大任を全ふされん事を託したり。小飼師も予の熱誠に動かされてか、心よく引受けられたり。次て下田来り共に午前十一時発飯にて大下条に向ふ筈なり。併して後、予は組合銅像委員と氏子惣代銅像委員と会して、八幡社地妙見山北の銅像建設予定地を見る約あり。自動車にて八幡山に来く。委員連中に設計書を示して了解を乞ひ置き、青山専務の申出により、吉田小原現業員の行績より吉田組合の製糸の成績を見るべく、江塚、田中両氏と雨中吉田に行く。同組合を視察したるに、別に範とすべき程の点もなく、且又小原も左程にも思はず

田中、江塚両氏の説も同様なれば、次に牛牧組合の状況を視察して帰り、銀行にて事務を見て後、夜本所にて開かれたる有経会に出席す。龍門寺和尚及小田切氏を頼む。

発信　山本、千章

十月二十六日　土曜

雨。鼎村長を誘ひて、銅像台石を見てもらはんとして松川入に行くへき計画し置きたるに、雨降り風吹けは、取止めんかとも思ひ居りて、支所に九時頃出頭すれは、既に青山出かけたりと聞きて、後を追ひて出かけ、林鼎村長宅にて彼ら両人と会す。手土産として敷島煙草箱入拾ケを持参せり。村沢茂吉をも伴ひて、松川大井取入に予定したる石を見て、他にも好適のものあるを見て、両人を誘ひてプールに行き、昼食をとりて話をなし、鼎村長に石の払下を頼みたり。四方の山々紅葉すれとも、降雨すれは秋の山を散歩するか如き気分起らず。初めて風越プールに行きて見るに、池の有様より山懐の景趣捨て難き所あり。紅葉は未た充分ならされとも、点々紅葉あり。流清くして静養等には適するが如し。午後三時一行と分れて、予は飯田へ下り池田屋にて靴下を買ひ、銀行に立寄る。既に銀行は閉業の時にて支配人、片桐等と話して午後五時半帰宅す。

朝、父より、村の状況に付て知る所を報告せんと云ふ小言を聞かさる。父は殆と父の為に予か生存しつゝある如く感するが如し。

社会の今日　官吏減俸問題引込めたり。此問題に付ては議論としては甚たよし。然れと政治的に付悪し

十月二十七日　日曜

晴。組合に出かけて支所より本所に行く。新栄会社の川口某来組し原製糸にて発明せられたしと云ふ製糸器械に付て、如何なるものなりやと問ひしに、単に発明器械の宣伝にあらすして、普通の操糸に対して三四倍の工程を進ましめ得るものなり、と答へたり。次て本支一時に火防及火災批難演習を執行し、予は支所にありて其演習を統監す。併して批評を加へて後上飯す。銀行にて大島（頭取中島）上伊那B有賀氏来り会して、協同社宮崎の整理問題に付、打合をなす。有賀氏の暴論自己中心にして耳を傾くるに足らず、前に上伊那頭取金井氏来行の上決したる宮崎案によりて、土地の等級を決して、之により農発勧業を受ける標準となさんと話し合ひたるに対し、上伊那は一応考慮したしと申込分れたり。其後、中学校運動場に於て宮田、赤穂支社等より同合したる野球団と本店野球団との試合あり。出席して後、児島にて慰労の夕食を喫す。

十月二十八日　月曜

晴雨。銀行へ出勤す。午後一時より重役会ありて、合併問題及上松春樹に贈るべき労慰金に付て相談せり。後仙安に於て夕食を喫す。増恵、山本へ行く。松尾つねと同伴せり。山本父来訪し、千章か＊＊せり物にて買入れたる＊＊に付て物言あり。何とか処分せさるべからず、為に電話を以て彼に＊＊＊円位ならば買ひ置くべしと通達せり。

金田より名古屋方面銀行より帰りたる件につき報告あり。飯田雑誌記者来訪し江塚の伝記如何とすゝめられたるもその考なしと断りたり。中原来訪したれは作興会の件につき相談せり。

電話にて吉野福一より話あり下久竪、富田等へ映画の為出張を依頼せり。

十月二十九日　火曜

曇晴。蘇峰先生の『日本帝国の一転機』を読む。言々句々憂国の文字、和漢洋の人物の警世の言を挽き来りて論する処、古に山陽あり、

現代に蘇峰先生あり。皆予の志と合し共鳴禁する能はず。殊に現状の日本を正視して愛国の至誠のほとばしりの出する所扼腕す。組合へ出かけたり。定款改正案につき、青山と会談す。午後に到りて郡組合より久保田を招きて定款改正につき意見を諮ふ。役場本塩より電話あり。三十一日午後一時より組合理事、村議、団体長等会合して副業の奨励及視察旅行の報告等につきて打合会を開く旨の話あり。又予より来る十一月十日、国民精神作興記念日に際して一分間の黙祷につき若し組合の汽笛を鳴らす要あれは応すべしとの申込みたり。帰りて支所へ立寄りて十一月一日休業するか又は操業するかの点につき市村と相談す。漁組矢作発電所見学の議ありたるも電話を以て欠席の旨通知せり。江塚三郎より報告を聞く。銀行欠勤す。

十月三十日　水曜

晴雨。銀行へ先つ出勤す。

十月三十一日　木曜

曇小雨。頭取、県参事会員となり不在なれは、銀行へ先つ行く。次て午後一時より燥場に開かれたる視察旅行の帰りの報告会に出席す。先つ群馬県及松本工業試験場視察の話あり。機業地を視察たれは玉繭の織物に付き村の副業奨励に関する話ありたるも、取りて組合に応用すべき事なし。午後六時より支所に於ける。

十一月三日　日曜

晴。別所柏屋別館を朝九時に出つ。産組大会に出席したるものは宿払殊に安し。原と共に午前十時上田に着す。朝、清水、久保田等に電車駅にて邂逅す。初めて彼等か来り居る事を知れり。午前十時より上田公会堂に於て県下産組大会開かれたり。十間～二十間の講堂立錐の地なし。二千人を座せられたり。例の型の如く初まり畢り迄同様なり。予は午前中空しく大会を見て居るのを面体なしと思ひて徴古館等を見物す。午後会議あり、次で会費の収納をなし中央会徳永某の私事の如き（演題は産業組合と女子の教育）ツマラン話あり。次に塩沢昌貞□氏の事につき問答あり、講演あり、雄弁にあらされとも国家的の念強し。

十一月四日　月曜

晴、霜沢山。戸倉の旅館、千曲館の夜早く明けて窓外を見れは、霜真白なり。原貞が笹屋に泊れ居るに分れて、鼎、牧野等と行を共にし、牧野は表彰額を大事にかゝえて帰り、一所に午前八時宿を出す。同宿者は大島、鼎、予とて十一名あり。朝の風吹き寒し。手を洋服の懐中に入れて千曲川の長橋を渡る。篠井に乗替下車して菊の栽培展覧会を見る。白の大輪見事なるものあり。午後二時半着飯。牧野と分れて銀行に入る。南信倉庫を検査せしむ。

十一月五日　火曜

組合支所に行きて製糸工場を見るにセリプレーン数日前より三、四点向上したるを見る。之れ、ウス皮の不透明なる糸値による事を研究の結果表れたるにより、付交（つきまぜ）せをする事か巧となりたる結果なりと、青山の話あり。次に江塚、青山等と共に組合の惣代会及理事会等につき打合をなして上飯す。受入の玉繭稍カビたる様子なり。銀行出勤すれは大平より電話あり。明日帰ると云ふ。

風呂場修繕出来新しくタイルを張り、長州風呂南天風呂となり旧時の面目を一新せり。其たき初をなす。柿千粒計りなり。本年は稀有の柿豊年なり。

米作は九月初旬以来雨天多く減収なるべし。青山、江塚に北信上田に於ける大会の状況報告せり。風呂場出来上り新しき風呂をたく。

広々爽し。
発信　山本父
受信　山本父
社会の今日　共産党事件解禁、全国九二五名に達す

十一月六日　水曜

晴。組合支所に至りて午前十時迄居りて事務を見たり後、銀行へ出勤す。組合にて田中荀一郎、代田彦一郎、松田政一の三人来りて予に対して新設の凍豆腐組合長となられたしとの申込ありし故、予は多忙なれは引受難しと云へは拝み倒し的に既に内定し来たれは是非名たけは拝借し度しとの事なれとも、君等が決するは何とでもよきも、予は困ると云ひ置けり。又曰く凍豆腐組合は和田氏の覇絆を脱する為に新に凍豆腐組合を造れり。併して新なる組合員によりて新生面を開かんとの話なれ共、其の言に信を置き難き事及決心なきもの如し。次て午後出勤す。大平帰銀したれとも合併問題に付簡単なる報告あり。次て退出す。

此日宮澤赤穂支店長共栄社問題に付来訪す。彼と共々話して仙安に入り夕食を共にす。共産党事件発表せられ下伊那に於ても十一名の被検挙者あり。国家に対しても申訳なき事なり。

十一月七日　木曜

雨。朝、松田政一来訪して豆腐組合にて本朝支所に於て会議を開きつゝあれは是非来臨ありたしとの事なれとも、警察署長と面会する要件あれは断つて雨中を上飯す。先つ聯合事務所を訪問して下田と小飼師を聘して、大下条、且開、平岡、和田、下久堅、喬木、神稲河野、千里等、十三ヶ所に亘り作興会の活動写真会を催したるに付、其の最終の日なれば小飼師に面会し、永らく映画教育に従事せられし事に付、礼を述べたり。又聯合分会の映画機を検点してもらえり。次て銀行に来り再ひ出てゝ常盤館に小飼師を訪問し、伴ひて東精軒に至り、昼食を共にす。中原も亦来り会し、下田も来る。小飼師に経費を一夜二十円と云ふのを十三夜にて二百五十円旅費共にマケてもらふ事とせり。午後一時半銀行を辞して組合本所に来り、役員会に臨み受入繭時価算定、持分配当を停止せられたるに付、準備金及持積金を出資し振替える等の相談をなす。

夜に入りて＊＊＊＊来訪し、＊＊＊＊＊＊の代理店をなすに付、合資会社五千円のものを造るに付、金一千円出資せられ度しとの申込あり。承諾す。
発信　綾川武治
社会の今日　下伊那に於ける共産党員十一名あり

十一月八日　金曜

雨曇。朝より直に出勤せんとしたるも組合支所に行き一巡して後、龍門寺を訪問し、伊澤一、大阪へ点炙の講習に出発する由なれは送別会を如何にすべきかに付、和尚に相談す。五平餅会を催して其の送別会とする事に打合せて市村をして斡旋せしむ。後、銀行出勤して状況を見て、午後三時銅像委員会を開きて左の件打合をなす。一、銅像建設地を借用すべき件に付、役場を経て県へ申達せり。尚、銅像建設に付、県へ願書呈出すべく市瀬をして書類作製せしむ。村沢義吉と台石の交渉に付、経過を報告し、其如何を諮る。

＊＊＊＊＊会社五千円の資金にて作り、其の出資を求められたれは、大平、＊＊＊＊、関嶋と共に金壱千円迄の出資を引受ける事に決し調印せり。敏雄名古屋へ出発すとの話なり。青山、市瀬、木下及事務員を引連れ法金寺山へ行く。

十一月九日　土曜

晴曇。組合支所より役場に行き、田中と打合して吉川村長に面会す。銅像許可に付、促進方を申込みたるに、吉川村長は既に村協議会に於て可ならずと云ひたるものを今更村長が之を促進運動をなすは困るから此点は白紙を以て臨み度しとの事にて、田中荀一郎よりも種々懇談したるに、然らは一応は話して見るべしとて分れ、田中は医者へ健康診断に回り、予は本所へ行く。専務及木下千之助等事務員を引連れ法金寺本店組合の招に応して鳥山へ行き、不在なれは午前中より午後二時迄事務を見、又貯繭庫を見て後、上飯す。事務員へ昼休みに誰か一人は店頭に番すべしと命ず。銀行にて事務を指揮して後、午後五時伊原に於て開催中の螺鈿家具陳列会に臨みて香盆壱ヶを買ひ求めて帰る。銅像問題は係員もイヤ気を生したるもの、如く、始め場所を決定する時に当り青山のみに任せたる結果、只今の状況に陥りたるなり。

社会の今日　太平洋会議、動力会議等、国際的会議吾国に開かれる

十一月十日　日曜

雨。日曜日なれは組合にて終日出勤し来る。惣代会に於ける対策等につき研究したり。午前十時を期して国体観念を明徴ならしむべき為め黙祷を行ふ。中央警鐘、組合講堂を鳴らしめ、且又、寺の梵鐘を撞きて村民一般に黙祷を捧ぐ。黙祷詞は嘗て大正十三、四年頃予が作りたるものなり。年々黙祷を捧けつゝありしが、本年は共産党事件以来一般の国民一層国体に重を置く様になり。政府も之に付て目醒め来りたれば、各村何れかの催をなす。上郷村よりも黙祷につき何か施設を通達し来りたり。作興会に於ても各村へ国体観念明徴にすべき施設につき調査方を依頼したり。

銅像。石運搬につき請負方、青山をして当らしむ。

十一月十一日　月曜

雨。銀行へ直に出勤す。終日銀行業務に掌鞅したり。南信倉庫に井村氏共訪問して南倉改革案につき談したるも、井村氏は沈黙家なれば何の意見もなく、予は自分の意見として陳述し、追て銀行重役会を開きて南倉問題を議し、何とか改革案を建てさるへからさる旨を考慮したり。

尊王思想史出来上がり、邦文堂より其見本を持参したり。表装等につきて予の意見を陳ぶ。椀屋に御庚申講あり出席す。中島、泰治両氏のみ、予と三人の客なり。

＊＊、＊＊会社の件につき名古屋へ行きたる由。

社会の今日　金解禁問題八ヶ釜し

十一月十二日　火曜

曇。組合支所より銀行へ行く。青山より村沢義吉へ台石運搬費として二百六十円にて契約したる由話あり。役場本塩助役と打合をなして、神社有の土地を同台帳へ登録方を頼みたり。台石の件は取決めたるも未た銅像建設予定地定まらず如何にすべきかに付、常に心頭をなやませり。銀行に於ては大平と重役会の日取に付研究せしも、大平明日より県会開かるゝ為に相談に応せず、唯単純にはゆかぬ、との一言のみにて別れたり。邦文堂来り「勤王思想史」の跋文書いてくれと云ふ。中原に頼み置きたれば書いてくれると思ひしも、上京の為書けずと云ふ。然らば筆を取して書かんと思ひ机に倚りしも文想浮はず止む。木下老人来り父と共に一日清遊して夜に入りて帰られたり。

十一月十五日　金曜

〔全文省略〕

十一月十六日　日曜

半晴半曇。午前三時に起床して組合従業員二二名を伴ひて山本青木潟鳥網見物に行く。市村をして全部用意せしめ、一人に付餅詰一箇宛、鳥を五十羽買入れ、若し取れざる時の用意とす。皆トラックに乗込みて出発す。午前五時に山に着して蚕玉様の前に陣取りて鳥の捕うるを待ちしも僅に五羽とれたるのみにてとれず。焚火をなし火を囲みて酒を暖めて談ず。午前九時迄居たるも捕獲僅に五羽、下山す。未た早けれは直に山本竹村を訪問して炬燵にて休み、午後になりて銀行を訪れて聯合事務所に於て開かれたる作興会幹部会に出席す。幹部会終りて中原、今村両氏と話し合せ、特に百十七宿直屋に今村を招して夕食して日本国民性の模倣性及其現下の堕落を痛論せり。

十一月十七日　月曜

半曇晴。日曜日なれば悠々家居して後、組合へ出勤せんとせしに＊次郎来訪し、家整理に付、田地を買ひてくれとの話あり。併し汝の債務は幾何あるかと問へは千五百円計りあり。此際債務を皆済して後、新に家政を勤勉してとりたる方よかるべしと決心せりと答ふ。然らは汝の債権債務の関係をよく調査して後、整理に着手しては如何と話せしに、兎に角整理と決したれは田地を買入方考へ置かれたしとの話に、然らは父とも相談して後決すべしと答えたるに、彼辞去せり。次に新井青年中島正親及浜島二人来訪し、金解禁問題に付講演せられたしとの申込に対し、二十七日夜行ふべしと答へたり。

次に組合に行き青山と横浜行及銅像委員の長野行を決して本所に行く。塩沢廣太郎に手紙、田中荀一郎に電話を以て話せり。本所ては竹村要人来り、落木の件に付、役場と組合との間に行違あり話す。竹村の主張は、組合へ渡すべき落木は一五日払運賃役場持組合着一杯一二、三二銭なりとあり。組合は一九六にて落木もある筈なりと主張す。

十一月十八日　月曜

雨。朝、中島平一郎、朝鮮咸興に入営すとて四時に耕地の者集会所へ集まり、酒とムシタツクリにて壮行会を催す。之に出席して雨の中を八幡駅頭迄見送る。此フシダラな世の中に耕地の人々が早朝、併も雨の中をかく集まつて行を壮にするかと思へは日本人殊に農村の人々には誠に頼もしい所かある。帰りに組合支所に立より、朝の女工の集合状態を見る。毎朝五時半頃より起きて此工場に終日立ち働く女性、尊いものである事をつくづく考へさせられる。帰宅して朝食後銀行へ行く。種々の人々が立ち代り来行す。中扇鶴の主人と云ふ人、市原の信用を聞きに来る。野原□は間載一と云ふ画家を伴ひ来る。＊＊は＊＊＊＊の代理店引受に付、相談に来る。一一応接して返す。銀行放課後＊＊＊を訪問して、＊＊＊＊＊＊＊引受に関して大平に引受方を依頼すべく相談せり。夜八時半帰る。掛川校長より教育家の作興会幹事推薦来る。

予記　岡田一郎へ作興会幹事依頼内報す

発信　松下尚造、幹事依頼

十一月二十日　水曜

曇暖。朝七時横浜かとや旅館に着、直に電話にて神栄に通知し、原製糸研究所の操糸機械の一覧を頼む。直に川口来訪し、共に神栄会社を訪問せしに出荷を促さん為、特別の取扱をうけたり。次て田代氏も来り面接し、午前十時半、自動車にて二十二、三名と共に鶴見試験工場迄運ばれたり。入りて見るに機械は全く物理的のものにて、操糸に化学的のものなし。併し一粒宛運はれて自動的に点結する点は立派なる発明品なるべし。次て試験室を見、茶菓の饗応ありて一時間計りにて辞して再び帰浜し、川口と共に昼食を試み、再ひ神栄会社に入りて

屋内隈なく案内せられ、取引所を見物して波止場を巡りて帰宿して、夕食には川口、田代来訪して話し合ひ、将来を約して川口去る。明日の計画を互に話し合ひて寝に着く。郷里よりは暖にて戸を開きて涼風を入る位なり。

十一月二十一日　木曜

曇。旅館かどやへ日米商店の番頭佐々木来訪したれは、生糸の点数の余りに予想より低きをなじりたるも、彼不得要領なりしも、点数と価格との間に大なる不正あるが如きを語りたり。次て、国立生糸検査所を案内せしめて参観し、技師一林喜代太氏によりて、セリプレーンの説明及其他につきて聞く。次て、旭シルクを訪問して特に繰糸たるものゝ検査を乞ひ、又春一千斤の入荷を検査立会を約して、三井物産に到る途中、鳥菊にて昼食す。三井物産にては検査法方を一覧し、吉田初治郎氏に面会して米国に於ける生糸の消費状況及株式下落生糸価に及ぼしたる影響等につき説を聞き、次て旭シルクを訪問して、林支配人に面会して糸の買入を頼み検査場に行きて検査を見たるに、我糸は点数一層よきが如くあるも、其割合、価格よろしからさるが如き予想されたり。帰宿して再ひ、佐々木、安井両人来りたる。コムミツシヨンの請求の如し。日米商店の使用人の品位不快なり。次て宿を出て五時半上京して銀座街を青山、井沢と三人にて見物し、八幡堂に入る。夜行にて帰途に付く。

社会の今日　長野県会政友多数にて論戦混乱す

十一月二十二日　金曜

雨、曇。霧少し。辰野午前六時着、午前八時飯田に着し、牛乳にて朝食を済まして常盤館に郡青年上飯田、河野等に講演に巡回しつゝあり。北昷吉を訪問す。北氏警句口をついて出て久し振りにて友交を温めたり。曰く若し今回日蓮をして出てしめば必ず政友天魔、民政国賊、無産亡国等評したるなるべし。人の一生に羨望と尊敬とあり、士は〔官吏〕尊敬を受くべく羨望せらるべからず。商人は羨望せらるゝものなり。今の官吏には此両者を得んとするものあり。歎すべし。又曰く愛国大衆党の綱領は無産党に撰ふ所なし。私有財産の制限等は亡国的なり。宜しく無制限の富を造るべし。只国家には兵馬の権、産業の統制権、徴税権を有せしむれは足る。愛国大衆党の如き綱領は無産党と五十歩百歩の差のみ。談論風発、午前十一時、河野青年と携へて北氏、河野に行く。

午後一時より聯合事務所に於て産業組合長会あり出席す。農学校に産業組合課設置（費用二千円積立金より支出）の件、満場賛成。部会役員残りて操短問題等議したり。中原来訪し、思想史、北氏二十七日の茶話会の件につきて相談す。

十一月二十三日　土曜

快晴。暫く振りの天気である。我家の周囲の田の中ては稲扱が最中である。本年の秋は太陽の光に恵まれた事は少なかつたが、一天〔点〕の雲もなく輝く日を拝し得た今日は、何となく秋日和の幸を感して朝、居室の掃除をした。昨夜霜寒で足が冷えたので電燈をフトンの中に入れて遂に忘れて寝てしまつたので、毛布やフトンに焼穴を作つた。増恵も之を見て驚いた。朝九時半に漸く洋服に仕度をして外出した。組合支所にて、電話て金田に＊＊の＊＊＊＊＊＊代理店引受けに関する来訪を話したが、彼は＊＊が自身参上するからと云ふた。〔省略〕。支所にて片倉組の視察人を接待して後、午後本所に行つた。別に変つた事もなく、不在中やつて居た。米も安かつた。一駄倉入の二十四円二十銭と云ふのを僅に買ふた。八幡社に於て新穀頒布祭及農

会高階氏表頌式等あり。終つてミドリにて敬神講等の会合あり。夜、毛賀青年会の招きにより金解禁問題に付て一場の講演をなし十時帰る。社会の今日　県会臨時休会を多数決に決して騒然たり

十一月二十四日　日曜

晴。朝、石原を訪問す。上原慶應病院へ入院中の事より眼病の経過を訪ひ、一時間計り話して去る。組合支所に到れは竜丘組合より専務理事及現業員等来つて、糸価下落（一一九〇）の為、配分の悪しき予想及生糸のセリプレーン点数悪しきによつて何とか良策なきかと訪ね来りたれは、一個の力もて如何とも致しかたく、之を政策問題として連合会の問題として糸価維持策を講するより外なしと答へたり。次て本所に行き田中荀一郎を招きて銅像委員として出県の模様を聞きしに曰く、県の方には境内地又は社寺中に形像は建てしめさる方針なりと云へとも、又氏子惣代か来県せさるは意を得ず、との事なれは、今一応出県すべしとの説あり。次回には竹村順一と他に一名出県せられたしとの説あり。夜、小学校に北昤吉氏の講演あり。二時間半に亘り世界の大勢は国民主義たる事、露国の真似をするの愚なる事、日本の道徳の善後策的なる事、国民が堕落しつゝある事等を掲けて、将来日本が東西文明を摂取して新文明を世界に光被するの要を現代日本の改革案等につき、述べられて後、予は自宅に案内して一泊せしむ。上柳緑も亦来る。松島、塩沢も共に来る。

十一月二十五日　月曜

曇雨。北昤吉一泊して朝九時に大下条へ講演の為出かけるに付、緑伯父と共に自動車にて家を出て、南信自動車にて北氏の大下条行きを見送る。座光寺青年会長之に伴ふ。銀行に入りて事務を見、三徳中村山本片桐校長に電話にて今日の聯合事務所に於ける作興会及、之に館林警部補の共産党事件説明あれは聴きに来られては如何と誘ひたり。長野犀北館に電話にて吉川へ銅像の件、話したるも不在なり。午後一時聯合事務所に作興会あり出席す。館林警部補下伊那に於ける共産党事件につき講話ありたり。本塩助役来訪して銅像問題如何に成行しかに付き問合あり。夜放課後、恵比寿講の祝をなす。折詰を大平氏より長野の土産雉子の御馳走なり。夜、中原を訪問し、赤化事件の調査書を見、思想史の代価を定め、大衆党結党に付、意見を交換せり。高田病気危篤なる由を聞及ふ。

社会の今日　『日本新聞』二十二日のものに、愛国大衆党の準備委員として名か出たり

十一月二十六日　火曜

雨。前沢みち子の結婚式に郎党として赤穂春日廉太郎邸迄行く事を頼まれたれは、朝上飯し、銀行にて、公債担保として借用金四千六百円をなし、払込に充当したり。前沢俊之、及、松下と共に前沢に正午頃着す。福沢憲和媒酌人にて来り、膳出て居り。予は他の親類と共に見立の膳部もなく、郎党として自動車にて出発す。郎党、知亮、等、はつ、宮下の五名なり。春日家にては近藤氏の司会の下に神棚をしつらへて神前結婚式あり。披露宴は岩田楼にて四十四、五名の宴ありて、盛に催されたり。夜、午後十二時漸く宴を終る。近藤氏の依頼により春日家の主人代理の祝宴に挨拶に次て、予は一場の其場急造の祝辞を述へたり。来客中には山口英九郎、林高作兄弟、福沢勤、等あり。赤穂村内有力者を以て堆む。夜十二時御開きとなりて前沢に帰りて報告し寝る。

十一月二十七日　水曜

曇晴。前沢に一泊す。朝起き出つれは昨夜深更帰りて宴会の状況を

伯父に報告し寝に付きたる午前二時頃なれは、八時に起床す。片桐支店迄下りて電話にて組合支所と打合せたるに青山専務今尚帰宅せずと云ふ。然らは少し遅刻するも帰組すべしと伝言して午前十時半、組合着。銅像委員会に臨む。青山も亦帰り来り、田中荀一郎、塩沢廣太郎、木下千之助及予と前二人が出県の模様を聴取したるに、県の意向としては、不明瞭なるも他に適当なる建設場所あらば求むべしとの意志の如し。故に今一回氏子惣代（竹村順一）専務青山の二名出県し陳情し、運動して見ては如何と云ふ事になり、不日出県する事を約す。田中荀一郎の案なり。終わつて予は数日来の疲労を休めんと直に帰宅したるに、午後より聯合事務所に於て作興会幹部講習に行きたるもの、昼在郷軍人将校会の北氏の座談会を開きおきたれは、午後二時上飯聯合事務所に行く。北氏自動車に根羽より後れて来る。後会場を和泉社ホールに移して座談会を開き、北氏の日米改造論あり。午後九時に到る。

予記　此会合に於て猶興社を昨日予定なりしも座談に重きを置きたる為め出来す。委員を上けて後日社を建設する事とす

社会の今日　疑獄事件公開せられ小川平吉、天岡等の罪状明白となり

十一月二十八日　木曜

晴。午前八時半より青年訓練所査閲あり。高橋大佐来り査閲す。之を見んとして小学校へ出頭す。高橋大佐に会す。暫く其査閲を見て後、上飯す。北昷吉氏の出発を見送り常磐館を訪問し、小林焼ボーフラ壱個贈る。座光寺青年会長と共に飯田駅頭に見送る。龍門寺和尚及平栗両氏に邂逅し共に＊＊氏売立を見る。点数も少く、亦欲しきものも亦鮮し。茶碗七十二ケ壱箱に在るを頼み置きしか落札せしや否や、両人と共に和泉庄にて喫茶して分れ、予は銀行に入る。吉川亮夫より電話来り、銅像委員会の状況を話し、却下の旨を話す。電話にて吉川村長、来月一日頃迄不在の件、本塩と打合す。青山にも亦出県の際は大平、平野とも打合方話す。邦文堂来行し、思想史出版に関して価格等打合を行ふ。普及版三円、特装版四円として十二月五日より配本する事とせり。作興会は僅に金百円の予算を以て此大事業を行はんとし、予は私財を投して此挙を行ひたり。併も決算となれは猶多額の私財を投せさるべからず。

社会の今日　政界瀆職小川平吉以下、天岡直嘉等の罪状新聞紙上に掲載せられたり

十一月三十日　土曜

雨。午後銀行出勤す。午前中は年貢米六七俵入庫す。金田政五郎の倅を頼みたり。午後中原来訪し、愛国大衆党準備会に出席の件につき打合ありたれは夜に入りて中原を訪問す。席に市瀬居合せ、同党主義綱領等の批評を示し、何となく国家社会主義的口吻ある事、及政綱等につきて、猶、推敲の余地ある事を話し合ひて、予は八時二十八分飯田発にて中原に見送られて飯田駅より上京す。

社会の今日　高田茂氏葬式あり